



Title	Evaluation of Antiepileptic for Behavioral Symptoms in Severe Intellectual Disabilities
Author(s)	谷口, 謙
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/51978
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

Synopsis of Thesis

氏 名 Name	谷口謙
論文題名 Title	Evaluation of Antiepileptic for Behavioral Symptoms in Severe Intellectual Disabilities (重度知的障害者の行動症状に対する抗てんかん薬の評価)
論文内容の要旨 〔目的(Purpose)〕 重度知的障害者には他傷や自傷等の行動症状がしばしば認められ家庭や施設での生活上大きな障害となっている。その有病率は知的障害の程度、居住環境等の相違のため報告によって異なるが概ね10%から50%とされている。行動症状に対してはまず環境調整、行動療法などの非薬物的療法が試みられる。非薬物療法の効果が不十分であった場合、行動症状により本人や他者が外傷を負う危険が大きい場合、問題行動が高頻度あるいは重度である場合などに薬物療法の開始を検討する。薬物療法としてはまずリスペリドンなどの第2世代抗精神病薬が使用されることが多い。しかし、十分な効果が得られない場合があることに加え、錐体外路症状、抗プロラクチン血症、糖尿病や高脂血症等の代謝性障害等の副作用のため使用を継続することができない場合がある。抗てんかん薬は知的障害者の行動症状に対して有効であるという報告がなされてきた。抗精神病薬の効果が不十分である場合や副作用のため使用できない場合は抗てんかん薬が次の選択薬となってくるものと考え。我々はバルプロ酸、カルバマゼピン、フェニトインという3種の抗てんかん薬の知的障害者の行動症状に対する効果を評価するため行動症状の重症度と各抗てんかん薬の投与量との相関について検討した。 〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕 我々は入院中の知的障害症例80例に認められた行動症状の重症度について、Severe Behavior Disorder Assessment Scale(SBDAS)を用い、自傷、他傷、こだわり行動、器物破損、睡眠の乱れ、食事関係の問題、排泄の問題、多動、騒がしさ、パニック(突発的な興奮)、粗暴の11カテゴリー別にスコア化し評価した。また知的障害者の行動症状の背景因子について考察するためSBDASスコアの因子分析を行った。抽出された各因子のSBDASの点数とバルプロ酸、カルバマゼピン、フェニトインの3種の抗てんかん薬の投与量との間の相関の有無についてSpearmanの順位相関係数(r_s)を用いて検定した。SBDASスコアの因子分析により(1)こだわりの因子、(2)攻撃性の因子、および(3)自傷の因子の3因子が抽出された。バルプロ酸の1日投与量と(1)こだわりの因子のスコアとの間には逆相関の傾向を認めた($r_s=-0.28, p=0.051$)。またバルプロ酸の1日投与量と(3)自傷の因子のスコアの間には有意な逆相関を認めた($r_s=-0.45, p=0.001$)。カルバマゼピン及びフェニトインの1日投与量と各因子のスコアの間には有意な相関は認められなかった。各薬剤とSBDASの各カテゴリースコア別の相関を調べたところ、フェニトインの1日投与量とSBDASのパニック(突発的な興奮)のスコアの間には逆相関傾向を認めた($r_s=-0.45, p=0.053$)。フェニトインが衝動的な攻撃性に対し有効である可能性があると考え、我々は4症例に対しフェニトインを投与して投与前と投与4週後のSBDASスコア及び aberrant behavior checklist 日本語版(ABC-J)のスコアを対応のあるt検定で比較した。フェニトインの投与に際しては院内の倫理委員会の承認を得た上で、本人および後見人に文書で説明し同意を得た。フェニトイン投与前後でSBDASスコアに有意な変化は見られなかったが、ABC-Jスコアでは有意な改善を認めた。 〔総括(Conclusion)〕 知的障害者の行動症状には(1)こだわりの因子、(2)攻撃性の因子、および(3)自傷の因子という3種の背景因子があることが推定された。バルプロ酸は(1)こだわりの因子および(3)自傷の因子を背景とする行動症状に有効であり、フェニトインは(2)攻撃性の因子を背景とする行動症状に有効であると考えられた。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名) 谷口謙		
論文審査担当者	(職)	氏 名
	主 査	大阪大学教授 武田 雅彦
	副 査	大阪大学教授 大庭 恵一
	副 査	大阪大学教授 水田 一郎

論文審査の結果の要旨

重度知的障害者には他傷、自傷等の行動症状がしばしば認められ生活上大きな障害となっている。そのような行動症状に対して抗精神病薬、抗てんかん薬が有効であるという報告がなされてきた。本研究ではバルプロ酸、カルバマゼピン、フェニトインという3種の抗てんかん薬の知的障害者の行動症状に対する効果を評価した。知的障害者80症例において、Severe Behavior Disorder Assessment Scale (SBDAS) を用い行動症状の重症度を11のカテゴリー別に評価した。また背景因子を考察するためスコアの因子分析を行った。そしてSBDASスコアと3種の抗てんかん薬の投与量の相関について検定した。その結果、背景因子としてこだわりの因子、攻撃性の因子、および自傷の因子の3因子が抽出された。また、こだわりと自傷症状に対してはバルプロ酸が有効であり攻撃性に対してはフェニトインが有効と考えられた。これらの結果は知的障害者の薬物療法において有用な知見であり学位に値するものと認める。